月刊 Gekkan fetinove 2013 5月号

フェチノベ

粘液をブチ撒けろ！

小説

人外娼館の管理人
十二屋月食

スキュラとドタバタ
エロエロにゅるにゅる生活
沈黙の天使

魔界王国ヴェルマギア
トラム・デル

神楽遊び
カムケン

お食べ退魔録
注文の多い調理師

Gooey and Sticky
六病

挿絵
フラットライン
はちこすと

表紙　フラットライン

R18 Adult Only

2話

目が覚めると、そこはハオマの住んでいる山小屋の中だった。視線を窓の方へやると、どうやらまだ夜らしい。明るく輝く満月が夜空に浮かんでいる。

（夢……だったのかしら……）

上体を起こし、外ハネのショートカットを手櫛で整える。覚醒しきってない双眸で、ゆっくりと自分の身体を眺めた。そこでハオマは自分が何も身につけていないことに気がついた。全裸で寝るなんて、熱くて寝苦しい夜のときくらいしかしない。

どうしてこんな格好で寝ていたのか。少し記憶をさかのぼった途端に、堰を切ったようにハオマの記憶がよみがえってくる。そう、この山小屋からふもとの町まで行く途中にある洞窟で、町でお尋ね者になっていた淫魔、ポワンに襲われたのだ。そしてポワンに、無様に敗北してしまったのである。この身体のだるさは、彼女に精気を吸い取られたからだろう。

「こうしちゃ、いられないわ……」

例の洞窟に淫魔がいることを、町の人に伝えなければならない。これ以上の犠牲者を出さないためにも、ハオマは夜中だろうとかまわずに外へ出ようとした。
ベッドから降りようとして、ハオマは山小屋の床に異変が起きていることに気がついた。窓から差し込む月明かりによって、床がてらてらと濡れ光っているのが確認できた。
「なにこれ。粘液……？」
足をそっとのばして、つま先だけ床につけてみる。ぬるりとした粘液の感触が伝わってきた。
いったい山小屋はどうなってしまったのか。
危機感を覚えたハオマの耳に入ってきたのは、ちゅくちゅくという粘液のはじける音だった。それと断続的に聞こえてくる高い声。聞き覚えのあるそれは、自分を襲った淫魔の声に間違いない。それともう一人、別の声も混じっているようである。
（まさか、ポワンのほかにも淫魔が近くにいるっていうの？）
ハオマは顔をあげて声のする方を向いた。
「なっ！　なにやってるのよぉっ！」
そして、目の前に広がっていた光景に、思わず声を出してしまったのだった。
山小屋の、ベッドから離れた場所に淫魔が座っている。彼女がポワン。ハオマを襲った淫魔だ。紐のような衣服をずらして乳房をあらわにし、片手で揉みしだいている。もう片方の手は自身の陰部へと添えられていた。足を広げて座っているポワンは、指先でクリトリスを弄んでいる。セミロングの髪は、襟足の部分が首筋に張り付いている。上気した艶めかしい表情をして、しっとり潤んだ唇からは、絶え間なく喘ぎ声が洩

れている。
　ポワンが自分の山小屋の中で自慰に耽っていることももちろん驚きだが、それと同じくハオマを驚かせたのはポワンがオカズに使っていたものだった。
　ポワンの前には水晶が置かれており、そこから光が出ているのだ。それだけなら、ハオマも特に驚きもしなかっただろう。しかし、水晶から出る光の中には、ハオマとポワンのあられもない姿が映し出されていたのである。
　ポワンの放った粘液によって服を溶かされ、トリモチのようなネバネバにまみれながら、上気した身体を擦り合わせている。胸と胸とが押しつぶされ、ひしゃげて、不自由な身体を悶えさせるたびに粘液の糸が二人をつなぎとめて離さない。
　おまけに、
『やぁあっ。おっぱいが、くっついてる。引っ張られて、擦れるぅっ！』
『乳首❤　ネバネバ……❤　ああ、いいのぉっ❤』
　音声までばっちり入っていた。どうやらさきほどから聞こえていた声は、映像の中でレズプレイに夢中になっている二人の嬌声だったらしい。
（わ、わたし、こんな声出してたんだ……）
　平常心で自分の痴態を見ると、これが本当に自分の姿なのか信じられない気分になった。恥ずかしくなって顔が熱くなるが、今は恥ずかしがっている場合ではない。
（淫魔って、こんな魔法も使えるのね……）

ポワンの使っている魔法に、ハオマは素直に驚いていた。映像や音声を記録する魔法というのは、人間はまだ使うことができないのだ。魔法の技術については、ハオマたち人間よりもポワンのような淫魔を含めた、魔族と呼ばれる種族の方が進んでいるといわれている。進んでいるといっても、魔族たちはその技術を自分たちの娯楽のためにしか使わないらしい。魔族はすぐれた魔法技術を持っているのだが、それを人間に教えるつもりもないようで、人間は人間で、魔法について研究と発展を重ねているのだった。

（……って、感心している場合じゃないわ！）

つい、ポワンの魔法をじっくりと見物してしまった。こんな映像を見ながら、ポワンは手淫に夢中になっているのである。

よく見ると、床を覆っている粘液はポワンの身体から出ているようだった。手で陰部をまさぐりながら、全身の毛孔からとろとろとした粘液をあふれさせている。それが肌を伝って床まで滴っていたようだ。

「はぁ……はぁ……。イキそうなハオマちゃん、かわいいわぁ。ンッ。い、いまのところ、もう一回みせて。ああっ、そこそこ。ああん、ハオマちゃんエロかわいすぎっ。わたしも、ネバネバ乳首合わせに夢中になっちゃってるもの。身体の相性が良かったのねぇ。ああ、この映像はお気に入りにして、何回も使っちゃおうかしら。あ、またさっきのところまで巻き戻してちょうだい。ああ、本当、見てるだけで身体が火照ってきちゃう。指、止まらなくなっちゃうわぁ」

ポワンの視線は映像にくぎ付けになっているようで、ハオマが近付いたことにも気が付いていないようだった。ハオマと一緒に絶頂を迎える瞬間の映像を繰り返し再生しながら、ぴちゃぴちゃという粘液の泡立つ音を奏でている。

そんなポワンに向かって、ハオマは瓶から汲んだ水をぶっかけたのだった。
「ひゃあっ」
ポワンの口から頓狂な声が飛び出して、
「なにするのよ。せっかくイイところだったのに！」
ムッとした表情でハオマに抗議してきた。
「あなたこそ、ここでなにしてるのよ！」
「なにって……ナニじゃない。オナ……」
「そんなの見ればわかるわよ！　わたしが聞きたいのは、そういうことじゃないわ！　こ、これよ！」
ハオマは床に転がっている水晶を指さす。
「ああ、これ？」
「そう！　何なのよその魔法は！」
「これは、記録用の水晶なの。淫魔、というか、魔族の技術ね」
水晶を拾い上げて、ポワンは丁寧に説明した。
「子機が映したものを親機に記録させて、好きな時に、好きな場所で、その映像を見ることができるのよ。この前のハオマちゃんとの初エッチを、記録させておいたの❤」
ポワンはほんのりと頬を赤く染めていた。
『ああっ、イッ、イクッ！　んむぅっ、ううっ、むぐぅうううぅぅっ』
映っている映像は、ちょうど粘液まみれのハオマが、ポワンとともに絶頂を迎えるところだった。

蕩けた表情で、ポワンとともに粘液まみれの快楽におぼれている様子がばっちりと収められている。
「ほらみてよ。ハオマちゃんのイキ顔。かわいく撮れてるでしょ？」
「ふ、ふざけないでよ！」
烈火のように怒るハオマの剣幕に、ポワンは目を丸くする。
「そんなに怒らなくてもいいじゃない。倒れたハオマちゃんをここまでつれてきたのはあたしなのよ？」
「誰のせいで倒れたと思ってるのよ！」
「だって、ハオマちゃんがあまりにもかわいいからぁ❤　つい、精気を吸いすぎちゃった❤」
ポワンはペロリと舌を出してみせたのだった。獲物から精気を吸い取るのは、淫魔としては当然の行為である。そのためか、ポワンの顔に反省の色はまったく見られなかった。
「まったくもう。それはそれとして、この床を見てよ！」
「なにかしら？　あらあら、床が粘液まみれだわ」
「床のベトベト。この粘液、あなたのでしょ」
「やぁねぇ、あたしってば、濡れやすい体質だから」
「濡れやすいってレベルじゃないでしょ！　なんで照れてるのよ！」
「別にいいじゃない」
「よくないわよ！　誰が掃除すると思っているの！」
「あたしが適当にやっておくわよぅ。だって、ここは、わたしのハオマちゃんの家になるんだもの？」
「えっ？」

ハオマは耳を疑う。どうやらこの淫魔、洞窟からハオマの山小屋へと引っ越そうと思っているらしい。
「あの洞窟よりも、ずっと住みやすそうだわ。水やかまど、家具や食器、なんだか生活に必要なものはほとんど揃っているみたいだし。それと、外に菜園もあったから、自給自足もできるものね」
その口ぶりから察するに、ポワンはこの山小屋が気に入ってしまったとみえる。このままでは、本当にこの山小屋を淫魔の住処にされてしまう。
（そんなこと、させるもんですか！）
あの洞窟に住まわれるのも困るが、自分の居住地である山小屋を乗っ取られるのはもっと困る。
「ふふ、ハオマちゃんに粘液の使い方を教えてあげるって言ったでしょ？　水属性の魔法を扱える魔族や人間の中でも、ネバネバの魔法を使えるなんて、かなりレアなんだから。それに、魔族に魔法を教えてもらえるなんて、めったにないわよ？」
「確かに、そうだけど……」
「ついでに、この水晶でハオマちゃんの成長記録はばっちりつけてあげるわ。修行の成果はもちろん、身体の成長具合もね」
「やめなさいよ！　というか、そもそもお断りだわ！　わたしは、ちゃんとした水の魔法を扱えるようになりたいの。あなたみたいな淫魔と違って、好きで粘液を出しているわけじゃないのよ！　とにかく、わたしはあなたと一緒に暮らすつもりはないわ。出てってよ！」
「あら？　あたしがでていくの？」
「当たり前でしょ。だって、あなたはこれまでも住処を転々としてきたそうじゃないだったら別にここに住

まなくたっていいじゃない」
「たしかに、何度も引っ越しはしているけど。あたし、ハオマちゃんが粘液の魔法を有効活用できるようになってほしいし……」
「余計なお世話よ！　いいから、出ていって！」
迫ってくるハオマに、
「こういうやりかたはあんまり好きじゃないけど、仕方がないわね」
ポワンは不敵な笑みを浮かべて水晶を差し出した。
「……なによ？」
ハオマには、ポワンの意図がすぐにはわからなかった。
「そんな態度でいいのかしら？　あたしには、この水晶があるのよ。ハオマちゃんのあられもない姿がたっぷりと記録されているの。この魔法を応用すれば、ふもとの町に住むたくさんの人に、ハオマちゃんの恥ずかしい姿を見せることができるわ。ふふ、ハオマちゃんがネバネバまみれで気持ちよくなっているところを見たら、ハオマちゃんは町のみんなのオナペットになっちゃうわね」
「な、なんですって！」
ハオマは目を丸くする。
「……なんて、だまされないわよ。いくら魔族だからって、そんな都合のいい魔法が使えるはずがないわ」
魔族の技術は侮れない。しかしハオマはポワンが言っていることはただのはったりに過ぎないと思っていた。いくら魔法とはいえ万能ではないのだ。それは、魔法を修得するものが最初に学ぶ真理である。そうは

いっても、ハオマは顔からにじみ出る動揺の色を隠しきれていないようだった。
「それじゃあ、試してみる？」
と、ポワンが詠唱を始めようとしたところへ、ハオマはあわててポワンから水晶を取り上げようと突っ込んでいく。しかし、ポワンは軽い身のこなしでそれをよけたのだった。勢いあまって、ハオマは粘液まみれの床へと飛び込んでいく。
「あらら。大丈夫？」
心配するような声を出すポワンを、粘液にまみれたハオマは睨みつけた。
「そ、その水晶を、こっちに渡しなさい！」
「だめよ。これ、結構貴重なんだから」
ポワンは余裕の表情を浮かべていた。
『ああっ、イッ、イクッ！　んむぅっ、ううっ、むぐぅうううぅぅぅっ』
水晶からは、ハオマが絶頂を迎えるシーンが繰り返し映し出されている。見れば見るほど、ハオマにはそれが自分の姿だということが信じられない。
「ハオマちゃんの、初めてのネバネバアクメ❤　水晶自体も貴重だけれど、記録されている内容だって、とっても貴重なのよ。初めてっていうのは一生で一回しかないの。わかるでしょ？」
『ああっ、イッ、イクッ！　んむぅっ、ううっ、むぐぅうううぅぅぅっ』
映像の中のハオマが、幾度目かの絶頂を迎えた。
「そ、そんなところ、何度もみせるなぁあっ！」

羞恥に顔を真っ赤に染めて、ハオマはポワンへ飛びかかった。それを簡単にいなしてしまおうと、ポワンは考えていただろう。しかし、ハオマの足は床にまかれた粘液にすくわれてしまったのだった。
ぬるりと滑ったハオマはバランスを崩してしまう。傾いた身体の先にはポワンがいた。
「きゃぁあっ！」
「えっ、ハオマちゃん、ちょっとぉっ！」
不意打ちの倒れこみには、ポワンも対応できなかった。そのまま二人は折り重なるように床へ倒れてしまう。
「ああっ、水晶が」
ポワンの手から水晶玉が転げ落ちた。床へと落下した水晶玉は、ピシャッという音を立ててひび割れてしまった。
「やったわ！　これで……」
自分のあられもない姿がばらまかれることはないだろう。ハオマは安堵の声を出したが、同時に、両手に違和感を覚えた。
倒れた結果、ハオマはポワンを押し倒していた。そして両手は、ポワンの乳房をつかんでいたのである。粘液まみれになっていたポワンの柔肉は、じっとりと湿っていて、その肌は指に吸い付いてくるようだ。
「まあ。どさくさにまぎれてパイタッチだなんて。ハオマちゃんってば、大胆❤」
「ち、違うわよ。そんなつもりじゃ……って、なにこれ！」
あわてて手をどかそうとしたハオマだったが、両手がポワンの胸にくっついてしまっていた。ポワンの身

体を覆っていた粘液がハオマの指にからみついている。
「手が、離れない！　ど、どうなってるのよぉっ！」
「あらあら。粘液が乾きかけだったから、粘度が上がっていたのかもしれないわね」
「そ、そんなのありなわけ！」
「うふふ、じゃあ、アリってことで❤」
こんなときでも、ポワンは余裕の表情を見せ続けている。あせっているのはハオマだけだった。
「ううっ、んっ。ネバネバで、手が……、離れない……」
ポワンの身体から噴き出ていた粘着質な体液に、ハオマの手はしっかりと粘着してしまっていた。ゴム毬のようなポワンの乳房を、しっかりつかむように手をついてしまっていた。引き離そうと腕を動かすとポワンの乳房も一緒に引っ張られてくる。
「あぁん❤」
「ちょっと、変な声出さないでよ」
「だってハオマちゃん、おっぱい揉むの激しいんだもの。そんなにがっつかなくても、おっぱいは逃げないわよ？」
「そんなつもりでやってるんじゃないわよ！　ああもう、離れないっ。あなたのせいなんだから、なんとかしなさいよ」
「しばらくすれば、勝手にはがれると思うけど……。ふふっ、どうせなら、このままネバネバを楽しんじゃいましょうよ」

ポワンは小さく笑うと、ハオマに向かってゆっくりと手をのばしてきた。逃れようとしたハオマだったが、両手がふさがっている。その上、いつの間にか両足も床の粘液にからめとられてしまって動かない。
「ちょっとなにを……」
身じろぎするハオマの乳房をポワンの手が包み込む。冷たい粘液に覆われた手に触れられて、ハオマの身体がビクンと跳ねた。
「改めて触ってみると、ハオマちゃんって結構胸あるのね」
「な、なに言ってるのよ！　手を離しなさい！」
「うふふ。わたしの手もネバネバのベタベタだったから、ハオマちゃんの胸にくっついちゃった。ああん、くっついて離れないわ～」
「顔は困ってないじゃないのよ！　あっ、ンッ、くぅっ！」
「これがハオマちゃんのおっぱいかぁ❤　ふふっ、ほぉら、ネバネバ～❤」
「そんな、糸引いて遊ぶな、アッ、ひゃぁあっ！」
「今日のレッスンはネバネバおっぱいマッサージよ❤　さ、あたしの真似して手を動かして」
「誰がそんなこと、する、もんっ、かっ。アアッ！」
ハオマの抗議は、ポワンの手によってかき消される。乳房に粘着したポワンの手が、ゆっくりとした愛撫を開始したのである。
（これが……。い、淫魔の、愛撫……）
乳房を持ち上げるように、ただ揉まれているだけだというのに、的確にハオマに快感を送りこんでくる。

それが淫魔の愛撫だった。じわりじわりと快楽の波が、波紋となってハオマの全身へと広がっていく。ハオマはきゅっと唇を結んでそれに耐えていた。
「ハオマちゃんって、おっぱいの感度いいのね。お顔が真っ赤だわ」
「そんな、こと……。ンッ、んぅっ！」
「もう、淫魔の前なんだから、気持ちいいこと、我慢しなくたっていいのよ？　ほらほら、あたしのおっぱいも気持ちよくしてちょうだい？　それとも、またあたしに好き勝手されたいのかしら？」
ポワンは挑発するような口調でハオマを責めたてる。
（い、言わせて、おけば……ぁ）
身体の火照りに苛まれながら、ハオマは眼下にあるポワンを睨みつける。しかし、耳朶まで真っ赤に染めた表情ではあまりにも凄みがない。安い挑発ではあったが、ハオマも、このままポワンの好きにさせるつもりはなかった。ハオマも負けじと指を動かし始める。
「んんっ❤」
というくぐもった声がポワンの口から洩れた。
（うう、柔らかい……）
あらためてポワンの乳房に指をめり込ませる。豊かな双球はほどよい弾力だ。ハオマにとっては、他人の乳房を揉むなんてことはもちろん、淫魔の乳房を揉むなんてことはこれが初めてだった。自分の乳房との比較しかできないが、病みつきになってしまいそうな揉み心地である。
（このおっぱいで、たくさんの人間を誘惑してきたのね……）

このまま責められ続けるつもりはない。ハオマはゆっくりと指を動かし始める。ムニムニと揉みこむと、ポワンの口から悩ましい声が漏れだした。
「これ以上、あなたの好き勝手になんか、させないんだから！」
粘着液で張り付いた手でポワンの乳房を捏ねまわす。眼下のポワンはどうやら興奮しているようで、紅潮した身体を小刻みに震わせていた。ハオマに粘着させた手もあまり動いていないようだ。
「あんっ❤　いいわ、おっぱい……❤　ンッ、気持ちいい❤」
「あなただって、胸で感じまくってるじゃないの」
「だって、ハオマちゃんの手が、気持ちいいんだもの❤　アッ❤　はぁあっ❤」
表情に恥じらいの色を浮かべ、ポワンは急にしおらしくなった。先ほどまでの強気な態度とのギャップに、ハオマは不覚にもドキリとしてしまう。
「そんなことほめられたって、全然、嬉しくなんかないんだから！」
ハオマの責めにも力が入る。それに対抗するように、ポワンも指を動かし始めた。
「ハオマちゃんにも、してあげるわ❤」
「わ、わたしはいいわよ。ああっ、胸ぇ……！」
「ネバヌルまみれのハダカのお付き合いで、もっと仲良くなりましょう?」
「誰が淫魔と仲良く……って、あぁっ、なにこれぇっ！」
胸を揉んでいるうちに、ポワンの身体からじっとりとした粘液がにじみ出てきた。粘液まみれとなったポワンの乳房は、ぬるりぬるりとハオマの手の中から逃れていく。

「やだっ、また、ヌルヌルって……、ああっ、きゃぁあっ！」
両手足は粘着液でくっついていたはずなのに、ポワンから溢れた新たな粘液のせいでハオマは足を滑らせてしまう。初めて襲われた時とは逆に、ハオマがポワンに覆いかぶさり、乳房同士を擦り合わせる格好となった。
「ハオマちゃん、またあたしとおっぱい相撲したいの？」
「違うわよ！　ああっ、ヌルヌルして立てないぃっ！」
「やんっ❤　ハオマちゃん、上で暴れないで。感じちゃうわ❤」
「また、こんな時になにを……、んむぅっ、むむむぅうっ！」
ハオマはポワンに抱き締められる。驚いた所を、さらにキスの追撃を受けてしまった。
（やばい……。またこの、キス……）
淫魔の唾液が口腔へと流れ込んでくる。ポワンに催促されるがままに、ハオマは自分の舌をからませてしまっていた。ねっとり粘着質なディープキスにハオマの理性がこそぎ取られていく。
「オナニーの途中だったからかしら。なんだか身体が火照って、濡れちゃったのよぅ❤」
やっと唇を解放したポワンは、じっとり湿った口元をあげてはにかんでいる。胸を押し付け合っているせいか、ポワンの鼓動が伝わってくるのだ。トクトクと高鳴っている鼓動は、ポワンの興奮を如実に伝えている。
「だからって、どうしようっていうのよ」
「今回は、もっと仲良くなりましょうね❤」

ポワンは妖しく微笑むと、ハオマの肩に手を添える。そのまま滑りに任せてハオマの身体をくるりと回転させた。「きゃぁあっ！」というハオマの悲鳴が山小屋に響く。もちろんポワンはお構いなしだ。ハオマの頭はポワンの下半身へ、そしてハオマの下半身はポワンの目の前にさらされる格好となった。
「これがハオマちゃんのオマ×コ❤」
「やめてっ！　見るなぁっ！」
「お返しにあたしのマ×コも見せてるじゃない。ふふ、きれいな色ね。あら、濡れてるわ❤」
「違っ、これは、あなたの粘液が、アアッ！」
ポワンの指先がハオマの陰唇に触れる。誰にも触らせたことのない部分を、いとも簡単に触られてしまった。ピンク色の花びらを弄ばれると、ぞくぞくとした感覚が背筋を駆け抜けていく。
「ちっちゃくてかわいいオマ×コから、ハオマちゃんのネバネバが溢れてきているわ❤　あたしにおっぱい揉まれながらココをヌルヌルにしちゃったのね❤」
「違うって、言って……、るんぅっ！　やぁあっ、なにっ、なにしてるのよぉっ！」
「ハオマちゃんのオマ×コ、ペロペロしてるの❤」
「やっ、やめてよっ！　そんなとこ、汚い、いひぃっ！」
「汚くなんかないわよ❤　ちゅっ❤　れろ、れろ……❤」
「ひゃぁああっ！」
指とは違う刺激に、ハオマはひときわ大きな嬌声を上げた。ハオマの女陰に触れていたのはポワンの舌粘膜だった。指で陰唇を広げながら、ポワンの舌がハオマの粘膜を擦り上げる。淫魔の舌は長く、ハオマの女

陰のすべてを一舐めにしてしまう。
「れろんっ。れろんっ。ハオマちゃんのオマ×コ❤　おいしいわぁ❤　いやらしいお汁でベトベトで、舐めても舐めても奥から溢れてくるぅ❤」
「いやぁっ！　舐めた感想なんか聞きたくないぃっ！」
ハオマは涙目になりながらポワンから逃れようとするが、手足は粘液に滑ってしまう上、腰が動けばポワンもそれを追跡してくる。それだけでなく、淫魔の舌がもたらす快感はハオマからどんどん抵抗する力を奪っていくのだ。陰部を舐めまわされるという鮮烈な快感の前に、ハオマの四肢には力が入らなくなり、思考にも徐々に霞がかかってくる。
（アソコ、舐められてるのにぃっ！　ああ、気持ちいい。こんなに気持ちいいの、初めてだよぉっ！）
屈辱感すらハオマの愉悦を後押しする。どんどん未知の快感が引き出されていく感触に、ハオマは身体を震わせる。同性の淫魔は的確にハオマの感じるポイントを刺激してくる。淫魔の舌はザラザラしている部分もあり、それがハオマに甘美な刺激をもたらすのだ。無意識のうちに、ハオマは抵抗をやめて、素直にポワンの舌に身をゆだねていた。
「ハオマちゃんも舐めて❤　イカせっこで仲良くなりましょう❤」
ポワンに催促され、ハオマは視線をポワンの陰部へと向けた。粘液に覆われた淫魔の女陰は、若干黒ずんでいて、大きな花びらがほころんでいた。濡れ光る粘膜に囲まれた牝穴からは、濃厚な性臭が漂ってハオマの鼻孔をくすぐる。
（淫魔の……ポワンのアソコ……）

思考が麻痺しているハオマはポワンの陰部へと吸い寄せられていく。ぬらつく粘膜へ、ハオマは唇をつけた。
「ンッ！」
ハオマは目を丸くする。唇を陰唇につけたまま、離れなくなってしまったのだ。
「くひびゆがぁっ！　くう、くっひゅいたぁあっ！」
「落ち着いて、ハオマちゃん。これからオマ×コを舐めあうんだから、あたしのマ×コに唇をくっつけたままでもいいの。ほら、ペロペロして……❤」
ポワンはハオマに向かって腰を押し付けてくる。ハオマも観念して、ポワンがあふれさせる淫汁を舐め取り始めた。
「んふっ、ンッ。れろ、れろ……」
ポワンの愛液は甘酸っぱく、粘度が高いせいか舌にからみついてくる。ポワンの牝臭が口腔いっぱいに広がって、頭がクラクラしてしまう。
（わたし、また、ポワンに流されてる……。でも、身体が勝手に動いちゃう。ヌルヌルになりながら、ポワンのアソコをペロペロしちゃうよぉっ）
ハオマは夢中になってポワンの女陰を舐っていた。異常な状況にもかかわらず、身体は自然にポワンのことを求めてしまっている。粘着してしまった唇を無理に離そうともせずに、ハオマはポワンの粘液を味わうのだった。
「やっと素直になってくれたわね。じゃあ、あたしもいっぱいペロペロしてあげる。ハオマちゃんのエッチ

なネバネバお汁……❤　ちゅるっ、ちゅぷ、ちゅるるっ❤」
　敏感な粘膜が、再びポワンによって責めたてられる。身体を悶えさせようにも、ハオマの身体はポワンと粘着し、密着してしまっていた。二人にできることは、相手の陰部を舐めることだけ。月明かりのさしこむ山小屋で、二人の少女はシックスナインの体勢で相手の股間に顔をうずめていた。ねちゃねちゃという粘着音を立てながら、互いに性感を高めあう。
（ポワンのこと舐めながら、わたし、変な気分になってる。舐められながら、どんどんエッチになっちゃってるよぉ）
　切なさと息苦しさに顔を赤く染めながら、ハオマはすっかりポワンのペースにのまれていた。卑猥な粘着音を立てながらポワンを責めたてる。足元からはポワンの喘ぎ声が聞こえてくる。初めてゆえの拙い舌遣いではあるが、ポワンは悦んでいるようだ。それが自信となってハオマの動きをより大胆にする。
「ああん❤　ハオマちゃん、すごいぃ❤　オマ×コ、いっぱいペロペロされながら、あたしの身体からネバネバが溢れちゃう❤　はぁ❤　あたし、イカされちゃうかも❤　ンンッ❤　イカせっこだもの、あたしだって……ぺろっ❤　ちゅちゅぅっ❤」
「んっ、んむぅうっ！　ポワンの口が、アソコに吸いついてきてるぅっ！　わ、わたしだって。じゅるっ、じゅじゅぅうっ！」
「はあっ❤　アンッ❤　あぁんっ❤　いいのっ、腰、浮いちゃうのぉっ❤」
「わたしも、ああ、アソコ押し付けちゃうっ。身体が勝手に、舐めて欲しがっちゃうぅっ！」
　山小屋の内部は発情した二人の熱気によって汗ばむほどの室温になっていた。充満する甘い性臭に二人の

嬌声。さらには泡立つ粘液の淫らな水音がその空間をより淫靡なものへと昇華させていく。粘液まみれの床の上で、互いの陰部を押し付け合いながら濡れそぼった秘所を舐めあう。唇は陰唇に張り付いて離れられない。さらに両腕も相手の腰をしっかり押さえこんで粘着していた。

（ポワンの腰が、ヒクヒクってしてる。もう、イキそうなのかな？　ああ、わたしも、もうイキそう。イカされちゃいそう……！）

ぬちゃぬちゃ、ねちゃねちゃという粘着音を立てながら、ハオマはポワンとのレズ行為に耽る。このままポワンをイカせてやろうとポワンの陰部を責めたてる。ポワンも激しく舌を動かしているようで、荒い鼻息がハオマの臀部にかかっている。ポワンからにじみ出る大量の粘液でべたべたになりながら、二人は一緒になって絶頂へと上り詰めていった。

（ああっ、イクッ、もうイッちゃうぅううっ！）

目の裏に白い閃光が飛び散って、ハオマはとうとう絶頂を迎える。淫魔の舌技による初めてのオーガズムに、ハオマは唇を粘着させえたままくぐもった悲鳴をあげ、若い女体を悦びに震わせていた。それと同時に、ポワンも高い悲鳴を上げながら絶頂を迎えたようだった。

絶頂の余韻に身体を弛緩させ、ハオマはポワンの上からぬるりと滑りおちる。粘液の床の上でうつぶせになりながら、ゆっくりとまぶたを閉じたのだった。

一夜の戯れのあと、ハオマは目覚める。ゆっくりと身体を起こすと、隣ではまだポワンは眠っているようだった。淫魔は基本的に夜行性であるため、この時間に目が覚めるということはないのだろう。ハオマは、

ポワンを起こさないように着替えて山小屋を後にする。
（わたしの山小屋を、ポワンから守らなくちゃ……）
これ以上、自分の生活を淫魔に脅かされてはたまらない。
ハオマはポワンのことを告げるためにふもとの町へと向かうのだった。